

# 利己的な聖人候補③

とりあえず異世界で  
ワガママさせてもらいます

やまなぎ  
Yamanagi



**サガン・サイテム**

メイロードの後見人  
兼ビジネスパートナー。

**セリリュウ**

メイロードの守護者。  
伝説の龍族のひとり。

**グッケンス博士**

メイロードの魔法の師匠。  
国の特級魔術師。

**ハルリリ**

シラン村で薬局を営む。  
心やさしくメイロードを見守る。

**メイロード・マリス**

神様の過保護な加護付きで転生した  
家事万能な元女子大生。  
周りの困っている人を  
放っておけない性格。

**セーヤ**

メイロードと契約した妖精。  
ヘアケアグッズを充実させて  
メイロードの美髪保持に  
邁進中。

**ソーヤ**

メイロードと契約した妖精。  
異世界の酒までもすべて  
試飲済みの万能ソムリエ。

## 目次

利己的な聖人候補 3

とりあえず異世界でワガママさせてもらいます

書き下ろし番外編

メイロードの雑貨店の平和な一日

## 利己的な聖人候補 3

とりあえず異世界でワガママさせてもらいます

## プロローグ

「メイロードさま、こちらの薬草棚はいくらなんでも在庫が多すぎです。回廊内には容量の制限がないとはいええ、これでは薬種問屋のようですよ」

「うーん、さすがにため込みすぎかな。それじゃ、二割ぐらい残して、あとは薬局のハルリリさんに買い取りをお願いしましょう。使い道の多い素材ばかりだから、薬局で余った分は薬種問屋に流してもらえばいいかな。ハルリリさんを通せば薬局の利益にもなるしね」

「承知いたしました。これで薬草棚の整理が進みます」

「ハルリリさんに習って魔法薬が作れるようになってから、素材になりそうな植物を見つけると、採らずにはいられなくなっちゃって……」

「メイロードさまの《素敵》と《地形把握》があれば、どんな場所でも宝の山ですからねえ。それにしてもこの量はやりすぎですよ」

呆れ顔のため息をつきながらも爆速で仕事を進めるソーヤは私と契約中の家事妖精だ。その可愛らしい少年の姿からは信じられない怪力で、私の持つ《無限回廊の扉》という容量無限の不思議な倉庫に山積みになっている薬の調合用素材を整理してくれている。すると今度はもうひとりの妖精さんから《念話》が飛んできた。

「メイロードさま、調味料棚の在庫がだいぶ減ってきているようです。どうなさいますか？」

「ありがたいそうソーヤ、それじゃ少し多めに買っておきましょうか。器を用意してくれる？」

「承知いたしました」

ソーヤは私の髪を偏愛しているちよつと変わった妖精さん、この子とも契約中だ。

回廊内の調味料棚にすぐに向かった私は、慣れた動作で《異世界召喚の陣》を開き、味噌、日本酒、醤油、みりん、きび砂糖、出汁昆布、鰹の削り節など、まだこの世界にはない調味料を召喚して用意した器に入れていく。

「うーん、値段を気にしなくてもいい買い物って最高ね！」

「ありがたいことでございます。メイロードさまが成功してくださったおかげで、異世界のシャンプーやリンス、トリートメントやヘアオイルなども思う存分使えます」

「いついかなるときでも私の髪の毛のケアが最優先なのねえ……まあ、セーヤにもずいぶん助けられているもんね。いくらでも買うわよ、異世界のヘアケアグッズ」

私は現在、日々の生活費を気にすることなく、転生してきたこの世界で生きていけるようになった。ここまでの日々は、驚きに満ちた不思議だらけの慌ただしいもので、私の望むのんびりした生活とはかけ離れていたけれど、これからはきつとそう生きていける……そう思いたい。

「まさか、あんな死に方をするとは思わなかったし、しかも転生するなんてね。あのときは、本当に驚いたし、本当に痛かった！」

以前の世界では家族のために懸命に生きてきた。その超多忙な生活からやつと自由になれる、その直前に事故死したのだ。

そのとき私が出会った神様は私に手違いを詫び、「滅私」の生き方をしてきた。小幡初子はつこを讀えた。そして、「聖人」として生きないかと誘われた。だが、そんなのはお断りだった。私は自分のことだけを考えてのんびり暮らしたかったのだから。

そして妥協案として提案されたのが、異世界への転生だった。

私は「メイド・ロード・マリス」というすでに魂の離れてしまった六歳の少女の躰の中に入り、新たな世界で人生を始めることになったのだ。

（おかげで転生初日から強盗と魔物に襲われて大怪我を負い、しばらく激痛と闘うことになつちやっただけね）

やつと回復してから知った、新しい世界での私の状況はなかなかきびしいものだった。両親は先の事件で死亡、見舞うはずだった祖父も他界。

天涯孤独の孤児となり、シド帝国の北東部にある辺境の村にひとり残されてしまった。頼りは祖父が経営していたという雑貨店兼住宅と多少の現金だけ。

「六歳児にはかなりつらい状況だったんだろうけど、私の中身は二十歳を超えた大人だったからね。対処を考えられたし、村の人たちも良くしてくれた。それに神様からは珍しいスキルをもらっていたから、それを有効活用してみようと思ったんだよね」

もらったスキルのひとつは以前の世界から品物を取り寄せられるという不思議な能力。ただ、それには対価（ただし補正あり。モノによっては原価の数百倍もする）が必要だった。そこですまは比較的对価が安い消耗品を中心に買ってみることにした。

（そのときから、自由に「お取り寄せ」を楽しむながら、この世界で快適に暮らすなら、しつかりお金を稼がなきゃいけないって思ったんだよね）

一念発起した私は、遺産として受け継いだ雑貨店を利用して商売を始めた。そこで活躍してくれたのが《生産の陣》という、この世界で一度作ったものは自由に複製できる

というスキル。これをフル稼働すれば原価を気にせずマヨネーズやトマトソースといった商品が複製できた。それを雑貨店で売ったのだ。

「この『メイロード・ソース』、爆売れしちゃったんだよねえ」

「あのときは大変でございましたね。サイDEM様のご尽力のおかげで商會を作られるところまで一息でございました。最年少商人ギルド登録者としても有名になられて……本当に忙しい日々でございました」

「そうだね。サイDEMおじさまはイスの首領らしい手助けをしてくれたよね」

『メイロード・ソース』というブランドで大々的に売り出された商品は大都会イスで大成功し、私に莫大な利益を与えてくれた。

それを後押ししてくれたのが、大商人でありメイロードの両親の幼馴染で親友でもあったサガン・サイDEMという人物だ。

「口が悪くて、仕事中毒な人だけど、まあ、メイロードにとっては数少ない知人だったし、貴重なアドバイスをくれる後見人だよね」

「いまではどちらかというところ、メイロードさまがサイDEM様の世話をされている気がします……」

「だって、ちゃんと食べない、ちゃんと寝ない、お酒は飲みすぎ、ラーメン食べすぎな

んだもの。心配するじゃない」

「いや、ラーメン食べすぎはメイロードさまのせいでは？」

「そうかな……でもまさか、あそこまでハマるとか、思わないじゃない」

サイDEMおじさまは私が研究を重ねて作り出した異世界ラーメンをいたく気に入り、いまでは立派なラーオタ（ラーメンオタク）なのだ。

「私の周りの大人はみんな変なのよ。ゲッケンス博士だって、天才魔術師なのに料理は壊滅的だし、家事は全然できないし、怪しい魔道具を大量に収集してる研究オタクなんだから。聖なる龍の一族のはずのセイリュウだって、いつつもお酒を飲みながらヘラヘラしてるし」

「ヘラヘラって……まあ、確かにそうですね」

「でも、そのゲッケンス博士のおかげで、この世界では貴重な乳牛も手に入れられましたし、メイロードさまの資産も増えましたよ。魔法だって教えていただきました」

「それは、とっても感謝してるけど……」

そう、それは私が料理に乳製品を使いたいと思ったことがきっかけだった。

だが、この世界では、乳製品を庶民が手に入れることは極めて難しかったのだ。魔物たちは牛が好物だったため、放牧などしたらあつという間に食い尽くされてしまう。

それを防ぐため、自前の騎士たちを多数抱えている大貴族たちだけが牧場を防衛でき、維持できるという状況で、牛に関するすべてが超高額で取引されていた。

それを農学博士でもあるグッケンス博士と私、そして大商人サイデムおじさまでタッグを組んでひっくり返し、牛乳やバターを庶民が食べられるような値段で作れる農場経営を始めたのだ。

(あの成功で信じられないような大金が私に入ってくるようになったんだよねえ)

「おじさまにすっかり気に入られちゃったおかげで、帝都パレスに行ったり、そこで大貴族であるドール様ご一家と仲良くなったり、家賃のために高級ジュエリーを作ってみたり、そうそう、おじさまの天敵だったパレス商人ギルドの統括幹事エスライ・タガローサとも会っちゃったわね」

「しかし……お忙しいですね」

「うん、私はのんびり田舎暮らしがしたいんだけどね。いや、するけどね!」

「……」

「それは無理な……」

「そんなことないもん! 私は自分のやりたいことを自分勝手にやっていくから! もう、ワガママ放題にやっちゃうんだからね!」

むくれた顔でそう言う私を見る妖精さんたちの目は、駄々をこねる子供を見るようだった。

「……そうでございますか。ところでメイロードさま、そろそろセイリユウ様とグッケンス様がおいでになる時刻では?」

「え、もうそんな時間!? 今日は辛い料理が食べたいってセイリユウのリクエストがあったから、麻婆豆腐を作ろうと思ってたんだ。ああ、豆板醤トウバンジャンの買い置きはあったかな。ええと、お酒は中国酒を用意しましょうか。老酒ラオチウに氷砂糖もね。ピータンも取り寄せようかな。お野菜もしっかり食べさせたいから、炒めものも作りましょう。野菜の在庫を見てくるね」

パタパタと駆け出す私の背中にセーヤはこうつぶやいた。

「ワガママねえ……?」

## 第一章 好奇心のままに学んでいく聖人候補

薬師ギルドの代表のトルッカ・ゼンモンさんは、イスの老舗薬種問屋セトシヤの仙鏡院センキョウインの

ご主人だ。

この店は薬種問屋として薬関連の素材を販売しているだけでなく、薬の卸と小売販売も行っている。その品質は世界一と謳われており、中でも天才薬師トルッカ・ゼンモンが作る「仙鏡院特製魔法薬」は大人気。その薬を求める人々で、店はいつもごった返している。

今日もその格式を感じさせる立派な木彫りの看板を掲げた大きな建物の中で、たくさんの優秀な薬師たちが忙しく立ち働いていた。売り子たちが対応する店舗部分の壁一面には、高い天井の際まで葉やその素材の箱がびっしりと並んでおり、「ここにはないならどこにもない」とまで言われる品揃えを誇っているようだ。世界中のありとあらゆる動植物、それに鉱物が薬の材料として集積された世界一の薬屋と評される店、それが「仙鏡院」だ。

この世界の薬にはふたつの系統がある。それは魔法薬とそうでないもの。魔法薬以外はいわゆる漢方薬に近い。そして多くの人にとって薬とはこの漢方薬に近いものを指し、この薬を作る薬師が実は大多数だ。

（でも魔法力があって、魔法技術を使えた方が、普通の薬を作るときも圧倒的に便利なんだよね。だから、薬師のほとんどはそれなりの魔法力を持つってわけ）

実際に薬づくりを体験してわかったことだが、魔法が使えると大量の材料を均一に精製できるし、衛生管理も楽だ。ほかに調合の微調整のやりやすさなど、いろいろな点でものすごく効率のいい作業ができる。そのため薬師にまったく魔法力がないという人は少ない。だが、魔法薬が作れるレベルの魔法力を持つ薬師もまた特別な存在で、薬師の中でも別格の扱いを受ける技能士となる。「魔法薬師」はかなりの高給であることはもちろん、ステータスも非常に高い敬われる存在だ。

（事実上「魔法薬師」は元の世界の医師に近い仕事なんだよね。そんな特別な薬師が作る魔法薬は処方薬に近いのかな、と私は理解してるんだけど、どうなんだろう？）

稀少な技能士であるため、当然、仕事の依頼もひっきりなし。市場流通量も少ないので魔法薬は高額なのだが、それでも需要は常にそれを上回っている。価格を下げるためにも流通量を増やしたいところだが、圧倒的に供給側のマンパワーが不足しているというにもならないと村の薬師であるハルリリさんは嘆いていた。ド田舎に住んでいるハルリリさんでさえ、ときには疲労困憊になるほどの依頼を抱えることもある。それぐらい「魔法薬師」が激務なのも、とことなく前世の医師を思わせる。

「仙鏡院」の店主であると同時に、世界最高峰の技術を持ち、神に一番近い魔法薬師と称されているゼンモンさんも、とてもお忙しい方だと聞いている。

今日は、そのゼンモンさんからご招待いただき、ハルリリさんと一緒に、この世界一の薬種問屋を見学させてもらえることになった。ゼンモンさんにお会いする昼食までの間は、倉庫でもどこでも好きに見ていいという素晴らしい許可も得た。私もハルリリさんも興味津々で、見慣れないものだらけで不思議な香りが充満した、この薬種問屋の店舗へ入った瞬間からワクワクが止まらない。

「すごい薬の種類ですね、ハルリリさん！」

「イヤイヤ、こちらの倉庫を見たらもつとびつくりするよ。ものすごいからね、この素材庫は！」

ハルリリさんも、耳がビョコビョコ動きっぱなしで興奮が隠しきれしていない。早速、案内役の店員の方に説明してもらいながら広い店内を抜け、いよいよ噂の巨大倉庫に潜入だ。

「貴重な素材はできる限りアイテムボックスでの保管を行っておりますが、なにせ量も数も膨大ですので、すべてを完璧に保管することはできません。通常保存されている素材がほとんどですので、管理はなかなか大変なのでございます」

案内のお姉さんがとても悩ましそうにため息をつく。気の毒になった私は、見せていただくお礼に、もし問題のある素材を見つけたら知らせると提案する。

「それはありがたいことでございます。本当に助かります。棚番号と品名をわかる範囲で書き留めていただけましたら、こちらで作業いたしますので、よろしく願います」

私とハルリリさんにはすぐに記録用の薄板と筆が渡された。お客様だろうと仕事ができる人には遠慮なし。ここも本気で人手が足りないらしい。私とハルリリさんは薄板を抱えて苦笑しながらも、第一倉庫へと足を踏み入れた。ここは植物素材中心で、一般的に多く使われる材料が集められた倉庫だという。荷物の出入りも激しく、人の出入りも多い。

私は棚を見ながらどんどんチェックを入れていく。

（東零一の三三五九棚ボンボン草、劣化した商品が奥に山積みのまま。同じく三二六五棚カンジン草、間違った品が混入している。西三四の二二九二棚、虫が発生している。アカミミ草が食べられている……つと）

私の新しいスキル《真贋》<sup>しんかん</sup>は、この倉庫チェックには最適の能力だ。問題のある場所は一目でわかる。もちろん《鑑定》もバリバリ発動中だ。

買いたい素材のリストも作成しながら、広い倉庫を移動していくと、そのうち私が棚の問題点を書き留めている様子をずっと横目で見ていた案内役の方がだんだん焦り出し、



ついに声を出した。

「あ、あの、いまチェックしていただいている分だけでも先にいただけませんか？ すぐに作業させたいので！」

すでに十枚ほどにびっしり書かれた問題点に目を通した案内役のお姉さんは、目を白黒させながら倉庫管理者の方と真剣に相談を始めてしまい、あれこれ指示を出している。どうやら時間がかかりそうなので、私とハルリリさんはチェックを続行しながら、勝手に見て回ることにした。うれしいことに早速知らない品種の薔薇ばらの種をたくさん見つけたので、購入決定。

（ここは宝の山だね！ いいものがまだまだありそう！）

「しかし想像を絶する量ですね、この倉庫」

第三倉庫にやってきた私とハルリリさんは、さすがにちょっと疲れてきた。

案内係の方もソワソワしているの、とりあえず倉庫内の机に座ってここまでの問題がありそうな棚のチェックリストを整理し、渡せる分を提出すると、案内係のお姉さんはパアッと顔を明るくして、何度も頭を下げた。

「ありがとうございます。いま、管理担当の者たちが総出で棚整理を行っています。やるべき仕事ははっきりしているので、考えられないぐらい効率よく進んでいます。本当

に助かります！」

私もいろいろなものが見られて《鑑定》し放題なので、この倉庫見学、楽しくてしょうがないのだが、それにしても確かに量が多すぎる。この巨大倉庫を管理維持していくのは並大抵ではない。おそらくエンドレスな仕事だ。しかも問題はいつどこで発生するかわからず、チェックのタイミングによっては素材の全滅といった取り返しのない事態も起こりうる。

（私の《真贋》<sup>ししがん</sup>が役に立つてなによりだけど、この状態ももう少しなんとかならないかなあ）

私の《無限回廊の扉》は、文字通り無限収納だし、劣化問題もないが、それでも管理は必要だ。アップグレードしてからは空間に自由に仕切りも作れるようになったので、いまでは綺麗に棚を並べている。試しにやってみたらできたので、インデックスでの素材管理も稼働中だ。物の場所とカードを魔法で紐付けしてみたところ、カードを持てばその場所まで線が引かれ道案内してくれるようになった。

私以外の人が無限回廊の中で物を探そうとしたとき、その方が圧倒的に早いのでとても助かっている。ちなみに私の頭には《地形把握》スキルを使った完璧な倉庫地図が入っているので迷うことはない。

（ここでも使えそうな効率のいい整理法があるといいんだろうけど……うーん）

いま見て回っている第三倉庫は輸入品が多く、価値のほどはまちまちだが、珍品が多いというので連れてきてもらった。

確かになんだか倉庫全体に漂う匂いも独特で、ほかの倉庫と違う気がする。ちよつとイスの外国人市場を彷彿とさせる匂いだ。

「ここ薬種問屋、仙鏡院<sup>せんきやういん</sup>では、研究のため、薬としての可能性のある素材はなんでも買い取りいたします。冒険者の方が持ち込まれるもの、遠い国から船で運ばれてきたもの、旅の薬師が山で見つけてきた珍種など、なんでも買い取り、分類し研究しております」

「それは素晴らしいですね」

ここはただの薬種問屋以上の存在なのだろう。研究機関としても機能しているし、あの意味博物学の領域を含んでいる。私は心底感心した。

「私もアイテムハンターをしながら旅をしていたときに、何度か買っていました。ここに持ち込めば必ず適正な価格の取引をいただけるので安心できるんですよ。いまも買い取りではお世話になってます」

ハルリリさんの若いころの旅の資金も、このお店が頼りだったらしい。最近では素材集

めもあまりできなくなってしまうけれど、資金が必要だった最初の時期に私が山から集めた素材も、ハルリリさんの薬となって一部はこの店に買い取られていたという。

この世界に来たばかりのあのころは手持ちの資金を増やす方法がまだなく、素材集めで得られた収入は本当にありがたいものだった。そう考えると、間接的に私も大変お世話になっているわけだ。薬や医療にかかわる人たちが聖地のようにこの店を崇める理由もちょっとわかってきた。

そんなことを話しながら棚のチェックと《鑑定》を続けているうち、ついに私は切望していたアイテムをふたつ見つけてしまった。

「ああ、あった。あったよ、お米だ!! あつちにあるのは胡椒!!」

どちらも少量しか保存されておらず数キロ程度しかなかったが、私には種が数粒あればこと足りる。

(絶対、なにがあっても買って帰るぞ!!)

私はニヤニヤと笑いそうになるのを堪えながら、棚番号をがちりメモし二重丸をつけた。

(小麦があるのに米がないなんてありえないと思ったんだ。ついに発見したぞ。ヒヤッホーイ!!)

表面上平静を装っていたが、私の頭の中はお祭り騒ぎだ。とにかく稲さえ作れば、米麴こめこうへの道が開け、この世界での醤油醸造への道が開ける可能性が高まる。

(ちよつとほっそりした米だったな。でもこれがあるなら、もう少し探せば日本米に近いものも見つかる気がしてきた。人目がなければもつと本格的に《索敵》を展開して探したいんだけど……うーん)

これだけ物が密集した場所で《索敵》をやり始めると、さすがに集中しないといけないので、スキルを使っていると丸わかりになってしまう。スキルも魔法も使えませぬというていの私としては、人目が多いところではそういう姿は見せたくない。

そうこう悩んでいるうちにお昼が近づいてきた。

「そろそろお昼ですね。ゼンモン様のお仕事が一息ついたところでご案内いたしますので、しばらくこちらでお待ちくださいませ」

私はここまでのチェックリストと購入したい品物のリストを案内の方にお願ひし、薬草茶をいただきながら隠密行動中のソーヤと《念話》で発信する。

「ゼンモンさんはどんなご様子かしら?」

「メイロードさまにとっても関心を持たれているのは間違いないですね。倉庫でのご様子も逐次報告を受けていて、とても興味深いと話されていました」

実はこの倉庫に来る前に、ソーヤには隠密行動が得意な性質を生かして、ゼンモンさんの様子を観察してもらっていた。

今回のご招待に関しては、サイデムおじさまからも油断するなど事前に言われていたし、ほかの情報からもゼンモンさんがなかなか一筋縄ではいかない人らしいと判断してのことだ。

「それから、こうも言われていました。『サイデムとグルムを敵に回すのは得策ではないし、いまは親交を深めるに留めておくとしようか。どうやら向学心のある娘らしいし、いづれ私が手を貸す機会もやっつてこよう』だそうです」

「なるほどねえ。興味を持たれたことがいいのか悪いのか微妙なところだけれど、悪い印象は持たれていないみたいで安心したわ」

「この方もサイデム様に負けず劣らずの仕事人間のようでございますよ。常に複数の仕事をしながら話を聞いている状態でしたから。有能なほど忙しくなるというのは皮肉なものでございますね」

「みんな忙しいのね。観察ありがとうソーヤ、あとは適当なところで戻ってきてね」

そこで案内の方がやってきたので、私たちは席を立ちゼンモンさんのお部屋へ向かった。

案内の方からの情報もソーヤと同じで、ゼンモンさんの仕事ぶりもサイデムおじさまと同様に多忙を極めているそうだ。月の半分は「仙鏡院」で寝泊まりしているので、店の中に生活できる部屋をお持ちなのも同じ。その部屋のキッチンをお借りして最後の仕上げをしてから、お土産代わりのお弁当をお出ししようと思っている。

テーマは医食同源。

丁寧に汁を取って塩分を控え、栄養も十分取れるようバランスを考えてみた。野菜の煮物、鳥の焼き物、白身魚の一夜干し、卵焼きに漬物数種、汁物は野菜と芋、デザートはプリン。

ものすごくご飯を食べたくなるメニューなので、今回は異世界産のおにぎりを持ち込んだ。魚沼産コシヒカリの上モノの塩むすびだ。

「この献立に合う主食として、まだ普及はしていない食材ですが、米を炊いて持ってまいりました」

私の前の席に座られたゼンモンさんはニコニコと料理を見渡している。

片やハルリリさんは、憧れというか「神」というかそういう存在の人との食事にガチガチで、いつもの圧倒的な食欲さえ出てこないようだ。

「先ほどの購入希望品リストにも、これと似たものがありましたね。ふむ、あれは主

食としてこのように使える食材でしたか」  
 (さつき渡したあのリストももうチェック済みですか。さすがゼンモンさん、目端が効く人だ)

塩むすびを美味しそうに頬張りながら、パリパリと漬物を食べるゼンモンさんは、なんとも幸せそうだ。

「先ほど倉庫から購入させていただいたものも米という点では同じなのですが、食味はだいぶ違うものです。できればこれに近いものが欲しいのですけれど、なかなか見つかりません」

私の言葉にゼンモンさんは、もしこれに近い米が入荷したら教えてくれると約束してくれた。大変心強い。

「あなたの料理の塩の使い方は、とても洗練されていますね。塩以外の味を使って上手く塩分を減らし、でも単調にならないよう、効かせるところはきっちり塩の味が生きている。素晴らしい調理技術ですね」

「ゼンモンさんもこの国の食事全般に感じられる味の濃さ、塩味偏重は良くないとお考えなんです」

「塩は必須の栄養ですが、摂りすぎれば毒。そう言われておりますが、実際に食すると

なると、慣れた味を変えることは難しいですね。困ったことです。塩を排出する魔法薬というものもあるのですが、安価ではないので常用できる方は少ないですね」

私はメイロード・ソースや給食、レシピ本を通じて、これからも塩味だけに頼らない食を普及していきたいとゼンモンさんに語った。

健康な人が増えれば私の仕事が増えるのでぜひそうしてください、とゼンモンさんは笑う。

「あなたの食事を食べると元気になるというのは本当ですね。なんだか疲れが取れた気がします。それでは午後の薬づくり、ご覧になりますか？」

「ぜひ！」

「ぜひ！」

私とハルリりさんの言葉が重なった。

午前中のゼンモンさんは、魔法専門薬を何種類か作っていたそうだ。

ハイパーポーション並みの効き目のある、一定の症状のみを改善する薬らしい。配合は極めて難しく作るための技術も要するが、効果のある疾患を限定することで稀少素材の量を圧倒的に減らせるため、かなり抑えた価格で売ることができ、数も作れるという。

「素晴らしいお薬ですね」

感心する私にゼンモンさんは少し困ったような顔になる。

「こうした価格と効能のバランスの取れた魔法専門薬は、需要が高く常に注文が入る薬のため、定期的に一定数を作り続けなければなりません。分業できればもっと効率がいいのですが、素材の用意や必要な機材の運搬などは弟子にも任せられるもの、それ以上となると……」

優秀な薬師の揃う「仙鏡院」でもゼンモンさんレベルの薬が作れる人材となると、その不足は深刻らしい。

「魔法薬師」として仕事ができるぐらいの魔法力がある弟子は何人かおりますが、どうにも皆修練と知識が足りず、合格点に値する者はごく少数なのです。この魔法薬程度はうちの薬師たちならば誰でも作れるようになってもらいたいのですが、まだまだほかの者に作らせると品質が安定しないのでね」

魔法薬以外なら製薬を任せられるが、それだけではゼンモンさんの負担がなかなか軽減されない。それが現在のこの薬種問屋一番の悩みようだ。

「それでも、いまは外部の薬師からの購入分を合算することでなんとか需要を満たし、店を回しております。ですがこれも事が起これば立ち行かなくなるのは自明のこと。まったくもって状況は危ういのですよ」

その表情には深い憂いがあった。

「午前中は、最近ダンジョンの難易度が全体に高くなってきているとゴルドム嬢から情報がありましたので、傷薬も普段の倍量ほど作りました。冒険者も大変ですね」

その薬づくりの様子は、千本を超える試験管のような入れ物が宙を舞う幻想的とすら見えるものなのだ、お付きの方が教えてくれた。素晴らしい魔法操作だが、ゼンモンさんにとってはそれが普通で、効率がいいからやっているだけだそうだ。

「では午後からは、さらに専門性の高い薬を作っていくかと思えます」

私たちが入室を許されたゼンモンさんの研究開発室では、すでにたくさんのお弟子さんたちがてんやわんやしていた。午後からのこの時間は、どの素材が必要になるのか直前になってもわからないことが多いため、準備するのも大変とのことだった。

(有能な上司の下で働くのも気苦労が多そうだね)

ゼンモンさんが尊敬されている大きな理由のひとつが、創業の技術だ。

新しい薬を作り出すというのは、知識と技術の両方に秀でていなくてはならないのもちろんだが、それだけではダメなのだ。ハルリリさんから聞いている。それぞれの効能を組み合わせ、ひとつの薬として落とし込むレシビづくりには特別な才能が必要で、それができる薬師は極めて稀まれなのだ。

この世界ではハルリリさんのように魔法力を使って人を癒せるヒーラーという能力者はいるが、いわゆる医者という職業はないらしい。

その代わり薬師、特に魔法薬師は医師のような役割を担っている。病気の治し方はさまざまな点で前の世界と違うし、それ以前にこの世界の人たちはよっぽどのことがない限り、薬やヒーラーの世話になろうとしない。どちらもかなり高額になることが多いため我慢してしまうのだ。

そんな環境の中、ゼンモンさんは稀少な素材を極力使わない特殊な専門薬の開発を続けている。なるべく買いやすい魔法薬を創るため、日々研究を続けている稀有な人のだ。なるほど、ハルリリさんが尊敬するのもよくわかる。

多くの薬師たちは修業の過程で師匠から学んだレシピを基に薬を作る。ゼンモンさんのような天才薬師の下で学べれば、多くの独創的な薬の知見が得られるため、弟子志願の薬師は後を絶たない。ここは薬師の修業の場でもあるわけだ。仙鏡院の入門試験がとてもしびしく狭き門だというのもうなずける。

今日は眼病の薬の処方を変更してみようと思っただけです。この間から取り組んでいるのですが、お年寄りの眼病を治す薬の効果がいまひとつ上がらないので、もう少し別の角度から手を加えてみたいと考えているのです」

目の前にはいろいろな薬瓶が並んでいる。涙の量を増やす「涙液」に目の緊張をほぐす「眼精疲労改善薬」、目のピントを回復する「焦点維持薬」、どれもゼンモンさんが自分で開発したもので、それぞれ非常にいい魔法薬だ。

「お年寄りですか……もし目の濁りが気になるようなら「色通しの実」が、もしかしたら効果があるのでは？」

私の言葉にゼンモンさんの目が光る。

「先ほど第二倉庫で見かけました。色通しの実には不思議な性質がありますよね。確かその実の搾り汁を入れるとどんな色も抜けるため、一部の地方ではシミ抜きに使われると。特に毒性も認められていないようですので、目の中の濁りがもしかしたら取れるかもしれません」

「素晴らしい。聞いたか、第二倉庫だ。すぐに取ってきなさい」

ゼンモンさんの言葉にあわてて弟子が駆けていく。

「あの短時間に、かなりの数の《鑑定》をしたようだね。しかも素晴らしい記憶力だ」  
実を言えば、私の前世で祖母が白内障を患っていたので、高齢者の眼病ならば水晶体の濁りが取れば改善するのではないかと思っただけだ。

あの「色通しの実」の性質も面白かったので記憶に残っていたにすぎないのだけれど、

お役に立ったようだなによりだ。それからは薬づくりのさまざまなテクニクを見せてもらい、ハルリリさんとふたりみっちり勉強させてもらった。創薬は奥が深い。

「君の意見を取り入れた眼病改善薬は、近いうちにきつと完成させますね。あれはいい提案でした」

ゼンモンさんも新しい薬の目処が立ったことでご機嫌だ。

「商売に飽きたら、ぜひ私のところへ修業にいらっしやい。試験は受けなくてもいいから。ハルリリさんもよかつたら、いつでも勉強においでになるとよろしい」

どこまで本気でどこまで冗談なのかわからないが、ニコニコと笑ってゼンモンさんはそんなことを言う。ハルリリさんは感激で目がウルウルだ。

私は大量に購入した素材や薬をソーヤに持ってもらい、帰りの挨拶をする。

「ありがとうございます。ぜひまたお邪魔させていただきます。今日は勉強になりました」

後日、私がこのときのお礼の手紙に添えて、紙を使ったカードでの素材管理法を伝えたところ、早速導入したそうで、便利に使ってもらっているという。そして後日、とても管理が楽になったという礼状と共に、日本のお米に近い品種の種が届けられた。

「ありがとう、大好き、ゼンモンさん!!」



私はこの世界について、実はあまり多くを知らない。この世界の記憶も知識もなく、生活のためにいきなり仕事を始めたのだから当たり前だが、国語や算数は問題ないものの、頼りないのが歴史や地理についての知識だ。いまはこの国の地図については読めるようになってきているけれど、それだけ。ただ場所の情報を知っているだけでは、それは地理として十分な知識とはいえないだろう。

最近、イスの外国人街に出かけたり、パレスに行ったりと行動範囲も広くなり、いろいろな新しいモノや人と出会うようになったことで、自分の知識不足をそのまま放置してはまずいのではないかと私は感じ始めていた。

そこで村の学校の授業に取り入れた地理・歴史の授業を受け持っているドワード先生に、週一で家庭教師をお願いできないかとお伺いしたところ、快く依頼を受けてくれたのだ。本当は子供たちとちゃんと学校の授業に出たいのだが、私が現れると気が散るだろうし、仕事もあるので定期的には行きづらく、苦肉の策といったところだ。場所は新設された村営図書館の中の会議室を借りた。

「ドゥードル先生、お忙しいところこのようなわがまを聞いてくださり、ありがとうございます」

頭を下げる私に、大げさに手を振り、逆に何度も頭を下げる先生。まだ三十歳になつたばかりの若い先生だが、パレスの地理院で働かされていたエキスパートだ。地理院の主な仕事は、軍部の作戦のための調べ物と地図作成。研究職希望だったドゥードル先生は、それが嫌になって退職されたそうで、すかさず教師としてスカウトしてきた。柔和でちょっと頼りない印象のほっそりした男性だが、眼鏡の奥の瞳は理知的で先生としての評判も上々。

「と、とんでもございません!! こちらこそなんと光栄なことでございます。メイロードさまに、私のつたない知識をご教授できる機会があるとは思いませんでした。ご自身が設立された学校にご出席になれないとはなんと悲しいことでございますが、お忙しい中、さらに勉学に励まれるとは、誠にもって素晴らしいことでございますよ」

メイロード・ソースの権利を村に委譲したことはみんなが知っているので、私は村人からものすごくありがたがられている。さらにドゥードル先生は学校設立の経緯もご存じなので、私に対して過剰な思い入れがあるようだ。

「あ、ありがとうございます。それほどたいしたことではないのですが……。早速ですが、まずは大まかな地理的情報からご教授をお願いしますでしょうか?」

「承知いたしました。それではわが国と周辺諸国について、本日は概略をお教えいたしましょう」

先生がひとつ咳払いをしたあと、授業開始だ。

「この世界に大陸はふたつ、イルガン大陸とエルガン大陸がございます。エルガン大陸はイルガン大陸の半分ほどの大きさです。過酷な環境と凶悪な魔物の棲む、人が足を踏み入れたことのない、未開の大陸でございます。位置的にはイルガン大陸の真裏の南半球に位置しておりますね」

ドゥードル先生は、略式の世界地図を持参してくれていた。

イルガン大陸にある主な国は三つ。シンド帝国、ロームバルト王国、キルム王国の三国だ。

「この中で最も新しい国がシンド帝国、私たちが住んでいるこの国です」

「現在の大陸では最も勢力の大きい国ですよ。でも、最近なんです」

「はい、この大陸の長い歴史からすれば、ごく最近の建国です。二百年ほど前ですね。

最初は小さな領土でしたが、未開の地を開拓しながら北東への進軍を行い、その領土を

急速に広がっていききました。九十年前、長い戦乱の歴史に終止符を打とうとしたシド帝国は、北東部の山脈を国境と定め、最後まで争っていたロームバルト王国と停戦合意を結びました」

「では、いまは平和と考えていいんですね」

「そうですね。現在三国間に紛争はございません。ただ、いまだに『停戦』であるため、現在友好的な関係を保ってはいえるものの、完全に兵力を国境から撤退させるまでには至っておりません。北東部から北部方面には常に兵が常駐しております」

「なるほど、そうだったんですね」

「では、次は沿海州についてお話しさせていただきます」

そこからは、イルガン大陸以外の人の住む地域についての話を聞いた。

「ちょうど、この大陸の南側に当たる地域に点在しておりますのが、沿海州諸国です。通称『沿海州』と呼ばれる大小の島国が集まった地域ですね」

キツペイの故郷のアキツ、そのほかにハーラーやザインといった名前のある国がある。それぞれ独立は保っているが、大国とは対等な関係とは言えないようだ。そのほかにも島はかなりの数があり、まだその全体を把握した地図はないらしい。

「軍部はもっと詳細な世界地図を持っておりますが、私たちが見ることはできませんか

らね」

ドゥードル先生は自嘲気味に笑った。研究者としては見たいが見られないというのはもどかしいことだろう。

「では、それぞれの国について、次はお話しいたしましょう」

先生は黒板に簡単な年表を書きながら説明してくれた。

「わが国シド帝国、その建国は二百年から二百五十年前といわれておりますが、黎明期につきましては、研究者の間でも意見はさまざまございまして、正確にはわかりません」

黎明期のシド帝国は、現在のパレスに近い場所に大きな集落ができたことから始まり、やがて国力を蓄え、開拓を始めた。開拓の過程で、周辺の魔物を倒して一掃しながら、その土地の集落を呑み込みつつそこから兵を募り、やがて組織が生まれ、軍部を統括する者が頭角を現した。彼は国としての形を作り上げ、皇帝の地位についた。

「これがハミル・シド皇帝陛下率いるシド帝国の誕生でございます。シド皇帝率いる帝国軍は勇猛果敢、劣悪な環境をモノともしない進軍で有名でした。死をも恐れぬ戦いぶりだったそうですよ。まあ、そのせいでロームバルト王国からは『蛮族』と長く呼ばれることになりましたが……」

また、この時点で皇帝を宣言したものの、建国に関してはまだまだ内政への準備がなされていないに等しいものだったため、ここをシド帝国の成立とするかどうかも玉虫色だ。

シド帝国が国としての機能を確立するまでにこのときから二十年を要し、公式にはハミル・シド帝即位から二十後の一月一日を建国の日と定めている。

「シド帝国も建国からしばらくは、内政が安定せず、皇帝位もめまぐるしく変わりました。しかし、ロームバルトとの停戦後は、非常に安定した状況が続いております」

賢帝と誉れ高い現皇帝は十五代皇帝テスル・シド。

三人の妃との間に、八人の皇子と三人の姫がある。かつては野蛮な烏合うごうの衆と蔑まれた帝国も、いまでは貴族を中心とした文化国家へと舵を切り替えた。大きな武力衝突もなく、治世は安定し、経済も発展している。

「わが国は軍事・経済とも、現在のところ、この世界最強の国と申し上げて良いでしょう」

ドワードル先生は誇らしげだ。

そして停戦中の相手国、シド帝国に次ぐ国力を持つロームバルト王国。建国二千年を超える長い歴史を持つ国家で、格式やしきたりにこだわりの強い国として知られている。

国力では遠くシド帝国に及ばないが、文化的成熟度ではロームバルトが優れているというプライドを非常に強く持っており、なにかにつけてシド帝国と張り合いたがる国だと先生は困り顔だ。特にこのふたつの大国の貴族同士は大変仲が悪いことで有名で、問題視されている。

「この間まで『蛮族』と罵っていたシド帝国に対してなんとか体面を保ちたいのでございませうね。ロームバルトの上から目線というのは有名で、面と向かって喧嘩はしなけれど嫌味たっぷりな態度をされがちで……」

思うところはあがるが、表面上は穏やかに交流しているということのようだ。

「現在の国王カシウス・アブシルド・ロームバルト三世は、なかなか評判の良い方です。両国の歪んだいがみ合いにも心を痛められているようで、近いうちにシド帝国の皇族の姫をロームバルトの第三王子に嫁がせるといふ計画もあると伺っております。両国にとってこれはとても意味のある結びつきとなるでしょう」

「それはおめでたいことですね。それを機に早く停戦ではなく、終戦になったらいいですね」

続いてはキルム王国についての話だ。キルム王国もロームバルトほどではないが古い歴史のある国だ。王国とはいいながら、この国は宗教国家の色合いが強い。

シド帝国と同じ聖天真教を国教と定めているが、意味合いはかなり異なる。特に大きく違うのは、教会の発言権が非常に強く精神的指導者としてだけでなく国政にも教会の意向がかかわっているという点だ。

「国境を接していないということもあり、敬いつつ接している、という感じでございますね」

授業はあつという間に時間になってしまった。久しぶりに学生らしいことができているんだかともうれしい。ドウドル先生の授業はとても楽しかった。

そしてこのあと、この授業を受けておいて本当によかったと思える一大事が私に降ってくるのだ。

## 第二章 『婚約式』をプロデュースする聖人候補

帝都パレスでは、年がら年中どこかでパーティーが開かれている。規模はさまざま、小さなものは召しかかえる使用人たちで準備を行うが、大規模な冠婚葬祭となると、とても自分たちだけでは抱えきれないため、懇意の商店に物資の発注込みで仕切らせるこ

とが多い。

帝都にはそれ得意とする商店もあるのだが、今回は名指しでサイテム商会にその依頼がきた。ドール侯爵経由らしいが、この類の依頼は確固たる信用がなければ絶対にこないものだ。

帝都の貴族たちにサイテム商会が認められた、喜ばしい仕事といえる。さらにいえば、商売としても非常にやりがいがあり、利益も大きい。ほぼ金額を気にせず準備ができる貴族の式典は、儲け口として極上、しかも成功すれば店のいい宣伝にもなる。

今回の依頼内容は、上級貴族の『婚約式』のプロデュースというものだった。

「すまん、お前の知恵を貸してくれ……」

突然サイテム商会に呼び出された私の前で、おじさまが深く頭を下げたのにはわけがある。サイテム商会が依頼を受けた案件が、とんでもないものだったからだ。

それは上級貴族の『婚約式』を取り仕切れという依頼。しかもその式の規模と政治的な意味はとて大きく、絶対に失敗は許されない。式にはシド帝国の皇族だけでなく、長年犬猿の仲であるロームバルト王国の王族も臨席する予定であり、国を挙げての一大イベントだった。

婚約されるのはロームバルト王国ローエングリム伯爵家の次男マリオン・ローエング

リム様とシド帝国のゴール伯爵家令嬢マリリア様。おふたりの婚約は、翌年に予定されているシド皇女様のお輿入れの前段階の婚儀となる。

この婚礼は両国の距離を縮め、結婚に関する文化交流をしつつ、メインである皇女様の式典に備えるものでもある。また、親しい従者を先に皇女様の嫁ぎ先に送り込むことで、皇女様の知らない国に嫁ぐ不安を解消するという意味もある。極めて政治的な婚姻だが、マリオン様とマリリア様のおふたりはお互いの役割をよく理解しており、仲睦まじいそうだ。

（貴族って大変なのね）

「あの国の貴族連中の上から目線のダメ出しは有名だからな。シド帝国を『文化果つる国』とか呼んでやがるし……とにかくすべてにおいてやつらの想像の上をいく式にすることが、絶対条件なんだ」

「でもおじさまは、こういう儀式とかキラキラとか苦手なんですよね」

おじさまは苦虫を噛み潰したような顔だ。

「女性商品部門から上がってくる提案も、なにが『ステキ』でなにが『カワイイ』のか、なにが正解なのかさっぱりわからんのだ！ 今回は化粧品事業のために作った女性商品部門と連携すれば大丈夫だと思って、彼女たちと一緒に策を練り始めたんだが、俺が

トップでは遅々として進まないことがわかった。無理だ！」

女性商品部門の方々はとても有能のだが、さすがに自分たちだけで判断できないし、いまままでにない斬新でなおかつ優美な上級貴族にふさわしい『婚約式』となると、かなりハードルが高いらしい。

（いつもなら引つ張ってくれるはずのボスはまったく役に立たないみたいだし）

「お前なら貴族の女性からの聞き取りも可能だし、新しい着想もあるだろう。なんとか相談役として参加してくれないか。頼む!!」

ここまで低姿勢のおじさまも珍しい。本当に向かない仕事のようだ。

「わかりましたよ。とりあえず貴族事情に詳しい人たちからの聞き取りですね。大貴族であるルミネール様とアリーシア様、もちろんマリリア様にも。それにセイツエさんもお話ししないと……」

私はノートを取り出し、やるべきことを書き出していく。

式は三か月後、シド帝国での『婚約式』。

列席者は二百名。披露宴のあと、千人規模のパーティーも行う。

結婚式は後日ロームバルト王国で行われる。

「できれば一度ロームバルト王国に行つて食事情など見ておきたいところですね」

「ロームバルト王国の首都にはうちの支店があるから、それは可能だ。いまは一般市民も普通に移動できるからな。近いうちに行けるよう手配する」

とりあえずサイテム商会の女性部門にプロジェクトチームを作ろう。三か月という期間は決して長くはない。おじさまは私をゆっくりとは遊ばせてくれないようだ。

（仕方ない、やりますか）

まず一番先に話を聞かなければならないのはセイツェさんだ。サイテム商会の貴族担当相談役セイツァさんにはアリーシア様の誕生日パーティーのときもとてもお世話になった。セレブの冠婚葬祭についてなら、この国にこの人以上に詳しい人はまずいない。私も、もしセイツェさんがいなかったら、きっとこの話には二の足を踏んでいたと思う。

おじさまの望むような演出だの驚かせる仕掛けだのと言う以前に、必要なのは、しきたりとマナーに則っているかどうかだ。儀式においては、そこをおろそかにしないことが、最も大切で成否を握っている。特に、婚約式<sup>①</sup>の部分は、絶対にミスは許されないだろう。ロームバルト王国との関係を考えれば、どんな隙も見せてはならない。

「この重大事を、サイテム様はメイロードさまに丸投げなされたのですか。なんとも大気しないことをなさる……」

セイツェさんは、嘆かわしいという顔で頭を振った。

「それについては同感ですが、事務的な部分や人員の調達、資材発注に関してはおじさまが責任を持って最高のものをご用意くださるそうです。私たちが考えなければならぬのは、ロームバルトの貴族の方々に失礼のない、格式高く美しい式典です。そこでまずはセイツェさんに、婚約式<sup>②</sup>についての詳細、そして行う際の注意事項についてお伺いしました」

セイツェさんは深くうなずくと、レクチャーを始めてくれた。

「婚約式<sup>③</sup>は上級貴族が他国へ嫁がれる場合のみ行われる式典です。内容はほぼ結婚式と同じと考えて差し支えありません」

上級貴族が他国へ嫁ぐことは、特に昔は人質としての意味合いが強かった。さらに、みだりに国を留守にできない立場の方々は、嫁がれる国での結婚式に出席できないことも多い。

そのため、この、婚約式<sup>④</sup>は他国で行われる結婚式に出席できない花嫁の親族に向けて、また国民に結婚を公にする儀式として始まったそうだ。そして二度と祖国へ戻れぬかもしれぬ娘と両親の最後の別れの儀式でもある。

「嫁がれた国での儀式に出席できないご両親に、結婚することを示す、祝いと別れの式なのでございますよ」

なかなか悲しくシビアな側面があるようだ。

「大まかな流れとしては、司祭によりこの婚約は神に祝福を受けたものである、という宣言を受けたあと、ふたりが宣誓を行い、お互いに相手が身につけるものを贈り合います。特に指輪といった決まりはございません。女性にはほかにもネックレスやブレスレット、ティアラなどが贈られ、男性には宝剣などが贈られることが多いですね」

そして最後に、祖国への別れを告げる儀式を執り行う。婚約式が終われば嫁ぎ先が用意した屋敷に移り、実家へ戻ることなくロームバルトで行われる結婚の儀を待つのだという。

「式自体は一時間程度でございましょうか。細かいしきたりはございますが、これは式の主役たる方々に覚えていただくしかございません。上級貴族の方々とはいえ、ロームバルト風に厳格に行うとなると、慣れないシド側の皆様にはご負担が大きいとは存じますが……」

「衣装についての制限はどうでしょう」

「そうでございませぬ。ロームバルトの方は男子正装とされている襟の高い白のご衣装になりましょうね。嫁がれる姫も、合わせて白のドレスということになりましょうか」

「ベールをつけるというのは失礼に当たるでしょうか？」

「そのような事例は聞いたことがありませんが、なにか意味のあることなのですか？」

私は純白のベールは魔除けの意味、そして女性の純潔を表すものとして、さらにいえば、式の演出としても、とても有効だということを説明した。

「なるほど、それならば、ぜひ取り入れられるべきです。シド帝国側が式典に新しいものを追加することは、わが国の成熟度を見せる上でも効果的でございましょう」

セイツェさんと話しているうちに、少しだけ構想ができてきた。

(最高に美しい花嫁を演出できるよう頑張ろう！)

その三日後、私はダイル・ドール参謀の住まう離宮を訪れた。

「久しぶりですね、メイロード。アリーシアが首を長くして待っていてよ」

今日も隅から隅まで隙のない美しさのルミナーレ様がにこやかに微笑む。

(まぶしい！ まぶしすぎる!!)

「メイロードも帝都に住めばよろしいのに！ イスは遠すぎますわ。それにないもないところなんでしょう？ 不便ではないの？」

アリーシア様は、せっかく親しくなったお気に入りのお友だち(私だ)と滅多に会えないことにご不満だ。いつも帝都へ移住するよう私に言ってくる。

「本日は急な訪問にもかかわらずお時間を取っていただき、感謝の言葉もございません。アリーシア様、ご心配いただきありがとうございます。ですが、私には両親の愛したあの村が肌に合っておりませぬので」

私はにっこり微笑んで、お辞儀をする。

「あなたは年に似合わず、礼節をわきまえた子だけれど、あまり他人行儀なのも悲しいわ。もっと楽しんでいいのですよ」

「そうよ、あなたは私のお友だちなんだから、もっと堂々としていいのよ！」

このおふたりは私をとて信頼してくださっている。いまでは本当に親しい親戚のような気安さで接してくださるのだ。

私の仕事に対する誠意が、おふたりの信頼に繋がっているならうれしい。

（お菓子で胃袋を掴んでしまった、というのもあるかもしれないけどね）

「本日お持ちしたお菓子はエクレアとクッキーでございます」

チョコレートがないので、エクレアの上は砂糖がけ、クッキーは思い切って白とピンクの市松模様にしてみた。焼いているうちに飛んでしまうのでほかではあるが、フルーツを使って色づけした。さわやかな香りがして、色合いも可愛いらしい。おふたりにピットリだと思っ。

「メイロードが持ってきてくれるお菓子は本当に美味しくて素敵ね。帝都のどこにも売っていないし、うちの料理人たちも作り方がまったくわからないみたい。誰も再現できないのよ」

アリーシア様の言葉に曖昧にうなずく。製法は「商品」、むやみに明かしてはいけな

いのだ。

（またおじさまに怒られたくないし……）  
ひとしきりお茶をしながら近況報告をしたあと、本題の「婚約式」について何うことができた。

「政情が安定したいまでは、昔の人質交換のようなことはなくなったのだけれど、今度は外交としての婚儀が必要になってきたのね」

少し悲しそうにルミナーレ様は語ってくれた。

本命の姫と王子の婚儀は一年先で、嫁がれるのは現帝の第二皇女十七歳のベラミ・シド姫だという。

「今回嫁がれるゴール家のマリリア様は、姫のご学友であり、幼馴染でもある方なの。彼女が側にいらっしやるなら、きっと心強いはずだわ」

「マリリア様はとーっってもお強いのよ。カッコイイの!!」